

図書館だより

'81. 4

出 会 い

黒 沢 和 夫 (衛生学)

健康とは疾病がなく、与えられた環境が健全で、その環境によく適応できる状態であるが、さらにその概念が拡大されて、生き生きとした生命感、生きてよかったという充実感の有無が健康の大切な要因となっている。そのような充実感を失っている、見かけ上の健康者を現代社会に多くみかける。

この充実感是自己独りの孤立生活では味わうことができなくて、人と人との相互関係が良好であって初めて味わうものである。良い人との出会いは人生最高の楽しみといえるが、又健康にも関連する要素でもある。

出会いにもいろいろあって、じかに人に接して交流をもつ直接的出会いと、直接の接触はなくてもその人から深い感銘をうける間接的出会いとに分けることができる。世の中に人の数は多いが、立派な人と長く交際できるという好運な例は稀である。ところが間接的出会いでは良い人の話をきいたり、読んだり、又、古今東西の傑出した人の書物を繙くことはある程度可能である。

私の乏しい経験からみても、学校時代には熱血漢の先生や碩学の先生等の講義をうけたが、どの先生も人生を前向きに進めという教示が含まれていた。しかし直接御交際を戴く機会には恵まれなかった。年がたつにつれ友人との会合

が楽しみとなってきたが、それは共に飲むからというよりも、共に元気で生きようという相互激励がそうさせるのであって、酒はその媒介役である。しかし生身の人間では離別はさげられないのに反して、書物は生涯座右から離れる心配がない。

心の拠り所とするに足る良書をうるためには、それに適った本を数多い店頭の本棚から選定する作業を要する。専門書の場合は「積読」ことも止むをえないが、心の糧になる本は数は少なくとも選びぬかれた好きな本を「精読」する必要がある。

生き方を深く考え、自分の人生観をつくることは創造機能であり、大脳前頭葉の貴重な働きである。この前頭葉は頭を使えば使う程、年令に関係なく発達するものである。心の拠り所となる本を読むことは楽しいことであり、又、心の健康増進に大いに役立つものである。昨今はレジャーブームで、マイカー、ゴルフや海外旅行等にうつつをぬかし、恰もそれが人生の目的のようにしている人が多いが、それはそれなりに結構なことと思う。しかしやり終った時の充実感は良き人、良き書物にめぐりあった、あの充実感以上のものとはとうてい思われないのである。

健康、さらに健康的な生き方というものを改めて見直す必要があるのではなからうか。

図書館をあなたのものに

入門読書あんない

— 一般教育科目の中から —



宗教学を学ぶにあたって

近野 亘 (宗教学)

カトリシズムを背景にしている本学では、ほとんど開学以来宗教学を必修科目にしている。当然のことなのであるが、ひとくちに宗教学といっても多岐にわたっている以上、限られた視点からの開設科目とならざるを得ない。基本的には、「人間と宗教」というきわめて原理的な問題とその考察を旨としている。同時にできるかぎり選択の巾を広げたいという願いから、開設科目にみられる必修選択制を取り入れている。

洋の東西を問わず、時代のいかにかわかわらず、人間の生きる世界に宗教なる事実が存在してきたし、今も存在している。これからもそうであろう。人間の生そのものにかかわる根源的な問題だからである。自分自身の主体的な受けとめ方にかかわらず、この事実は認めねばならないであろう。事実を事実として認めることは人間として最も大切な、時としては勇気を要する態度のひとつと言えらると思う。パスカルの言うように、事実の認容の後の真偽の識別こそ本当の批判というものだろう。それはまた学問研究に欠くことのできない謙虚さでもある。もちろん宗教は、遂には人間の内面にかかわる問題だから、主観的になる要因はあるし、また宗教的体験も宗教の大きな要素となっている。しかし宗教と呼ばれる現象に共通しているいくつかの要素をとりだすことはできるし、それ故に、宗教学・宗教哲学という学問領域が一比較的新らしい分野なのだが一成立してくるのである。人間についての基本的ないとなみの哲学的考察から宗教への道が開かれてくるのであるから、

「人間と宗教」なるテーマとして原理的諸問題はとりあげられねばならないであろう。

私たちの生活は、直接間接に古典というものによって導かれている。古典研究の大切なゆえんであるが、仏典、コーラン、聖書などの経典は、まずもって宗教的古典なのであるから、その意味でも大切に読まねばならないであろう。しかしまた、いわゆる古典と呼ばれるものとの相違もある。例えば、ギリシャ・ローマの古典は私たちの教養を深めてくれるが、聖書は人間の生きる目的・意味を教える。文化的古典と宗教的古典、あるいは、古典と経典の相違である。こうして文化と宗教、哲学倫理と宗教の相違と関係など、いろいろ展開されることになる。思索の足跡をたどる思想の歴史も大切である。大学は学ぶところ、そして生きる意味を探求する場である。経典の他に、基本的な文献として、西谷啓治著「宗教とは何か」(創文社)、川田熊太郎著「文化と宗教」(レグルス文庫)、R. オットー著「聖なるもの」(岩波文庫)。

美学関係資料の紹介

鬼丸 吉 弘 (美学)

美学はとり様で範囲の広い領域であるが、狭い意味での美学の概要を知るには、今道友信著「美について」(講談社現代新書)がある。この方向に興味のある人は文献目録がついているのでそれを手引にするとよい。ただしこの意味の美学は哲学の一分科に属するので、哲学概説と哲学史の知識が必要である。

美学をとくに芸術の理論と考えるなら、芸術学と同じになる。この方向では渡辺護著「芸術

学」(東大出版会)がある。それから山崎正和篇「近代の芸術論」(中央公論社・世界の名著 81)は演劇・美術・音楽・文芸に亘って近代の代表的な芸術理論を収録してあり、便利である。

美学は芸術史研究とも密接な関係があり、狭義の美学・芸術学は芸術史研究と相互に刺戟し交流し合いながら発展してきた。文芸・演劇・音楽については他に専門の方がおられるので省略し、ここでは美術についてだけ述べておく。

美学的理論と美術史を綜合した手近な著書に、H. リードの「芸術の意味」(みすず書房)がある。これはジャーナリストチックで読みやすいかもしれない。原本も入手しやすいが、ただ原本初版が1831年でやや古く、新しい研究で補う必要がある。その意味では同じイギリスのE. H. ゴンブリチの著がよいかもしれない。瀬戸慶久訳「芸術と幻影」(岩崎美術社)は美術理論の白眉と言ってよいもの。また友部直訳「美術の歩み」上・下(美術出版社)は、一般向きに西洋美術史の全体を解説した名著として評判が高い。通史には教科書風でおもしろみのないものがよくあるが、これはそうでない。もっと詳しいものではH. W. ジャンソン著「美術の歴史」(美術出版社)がよい。むろん大型の美術全集を別に用意できればなおいいが、むりなら、幸い本学図書館に代表的なものは数種類備えてあるので、大いに活用されたい。中で新潮社の「人類の美術」はルネサンス以前しか出ていないが、内容は世界的水準の高度なものである。近年朝日新聞社で出した朝日百科の「世界の美術」は執筆により内容にむらがあるものの、写真がわりとよく数も多いので、初歩向きに便利である。少数の名画を詳しく検討したものでは、高階秀爾著「名画を見る眼」正・続(岩波新書)がよく、現代絵画ではG. シュミット著「近代絵画の見かた」(現代教養文庫)が役だつたろう。その他K. クラーク著「ザ・ヌード」(美術出版社)、同じく「風景画論」(岩崎美術社)なども名著である。

一般教育としての 「法学」を学ぶために

後 藤 平 吉 (法学)

われわれは、社会生活をしている。古く、「社会あるところ法あり」といわれるように、法がなければ、社会の秩序・安定を保つことができず、社会生活は成り立たない。のみならず、貸した金を返してもらえず、人を殺してもそのままですまされるようでは正義に反することになる。法は正義の実現のためにも必要なものである。

われわれの日常生活のすべてが法に関係しているわけではない。人に恋したり、子どもたちをながめていたりすることは法に直接かかわりが無い。また、社会生活において守るべききまり(社会規範)は、法だけではない。道徳・宗教・慣習・礼儀などもある。しかし、法は強制力をともなうものであり、しかも、日常生活に関係することが多い。たとえば、自分の指輪を自分の指にはめていられるのは、自分が所有権をもっているから使用しうるのであり、また、これを売って金にかえるときは売買契約という法律行為によることになり、これを盗まれると、盗んだ人は窃盗罪として、法に背いたがゆえに罰せられることになる。家庭生活に関しても、法律事件となれば、裁判所は法を基準にして判決をくだす。つまり、法は裁判規範である。しかし、大学において法学を学ぶのは、自分の実生活に役立てるためだけではない。よき人間、よき社会人になるためにも有益である。のみならず、日本国憲法、なにかんづく基本的人権についてよく理解することは、よき国民、よき人間になるため、するためにも重要なことであり、このため、教師の資格を取得するために必ず履修すべき教職必修となっている。

大学で法学を学ぶことは、単に、法律の知識を得るためだけではない。法律の条文を暗記し、本に書いてある解釈を覚えるだけでは、まことに「灰色の学問」になってしまう。特に、

一般教育には、専門教育の基礎教育になることとともに、人間が、社会が「いかにあるべきか」ということを考える人間形成のための教養という要素がある。だから、法学の授業によって「あり方」をもとに考え、よりよき社会の創造に役立ててゆきたい。法学が、一般教育の授業として学ばれることは、決して「水準を低める」ことではなく、「一般教育的に」授業をすることなのである。なお、テキストとして、拙著の中から、この目的のために書いた『家族・その法と思想』（中央出版社）を用いているのもこのためである。

社会学を学ぶために

佐々木 隆 介 (社会学)

「社会学」は他の社会諸科学にくらべて、とらえにくいとの評があるが、それは次のように考えることが妥当であろう。社会学 (sociology) とは「人間の社会的共同生活を研究するひとつの社会科学である。」

人間の社会的共同生活にはいろいろな側面がある。それは身近なところでは家族にはじまり、地域社会、学校、会社、団体、国家、民族というように範囲がひろげられてゆく。そして社会学の課題は、人間の社会的共同生活の改善にあると考えられている。だから社会学はわたくしたちの生活と密接なかかわりのある学問なのである。

また社会学はその領域が巾ひろく分かれており、家族社会学、農村社会学、都市社会学、産業社会学、教育社会学、マス・コミュニケーション等の各分野ですぐれた研究成果があげられている。

(1)社会学の学び方として、ひとりの社会学者がこの学問ととりくんできた跡を回顧した、次の書物をまず一読されることをおすすめしたい。

・磯村英一著「人生社会学 20 の章」(毎日新聞社)

(2)入門書としては、多数の中から次の数点をあ

げておこう。

・福武直・浜島朗編「社会学」(有斐閣双書)

・日本社会学会編集委員会編「現代社会学入門」(有斐閣)

・内藤光爾編「社会学入門」(川島書店)

(3)社会学の歴史を学ぶ上には、次の本から入ることがよい。

・清水幾太郎著「オーギュスト・コントー社会学とは何か」(岩波新書)

(4)さらにすすんで社会学の学習を行うためには次のようなものがある。

・山根常男他編 テキストブック社会学 8巻 (有斐閣)

①入門社会学 ②家族 ③教育 ④職業

⑤地域社会 ⑥マスコミュニケーション

⑦福祉 ⑧社会心理

・福武直監修 社会学講座 18巻 (東京大学出版会)

(5)社会学の学習に際して必須なものに辞典がある。次のものがハンディである。

・石川晃弘他編「社会学小辞典」(有斐閣双書)

(6)またNHK教育テレビ「大学講座」でも、社会学がしばしばとりあげられ、テキストも発行されている。

(例 55年度後期 福武直 日本社会の構造)

生物学の課題

林 新 治 (生物学)

最近の生物学は、1950年頃から成熟しはじめた「分子生物学」の目ざましい成果を軸にして、その様相を大きく変えようとしている。

もとより、科学は人類の知的好奇心の現われであり、未知の世界への探究心という優れた資質が科学を発展させ、人類の繁栄をもたらしてきた。事実、近代科学が人類に与えた恩恵、便益は、はかり知れぬほど大きなものがある。

しかし、過去30年間に急速な成長をとげた分子生物学を中核とする、いわゆる生命科学の近年の著しい進歩は、同時に、我々の倫理、道徳に影を落としかねない様相を呈するに至っ

た。それは、生命に直接にかかわる学問領域だけに、科学とは何か、生命とは何か、という現代社会への重大な問いかけでもある。事実、生命現象の物理的、化学的解明が進み、生命の仕組みは基本的には細菌も人間もみな同じであることが明らかにされるようになってきた。さらに生命科学の進歩は、体外受精児を誕生させ、臓器移植を可能にし、遺伝子工学（遺伝子の人工的操作）の道を拓くなど、さまざまな新技術を実用化に近づけている。この見事な成果が、人々に生命の本質もやがて科学が解明するであろうとの思いを抱かせるまでに迫ってきた。

しかし、このような科学、技術の進歩のかげに、人類の未来を脅かす危険な落とし穴をかい間みる思いがしてならない。何故ならば、近代科学の成果が、いつまでも研究室内にとどまっている確証はないからである。パリ大学の薄暗い実験室で細々と行なわれていたウラン放射線の研究の成果が、のちに独り歩きをはじめ、原子爆弾という凶器ともなり、人類を破滅の瀬戸際に追い込んだ原子物理学の蛮行を、いま我々は生命科学に再び繰り返させてはならない。

一つの科学、技術の選択に人類の未来がかかることがある。原子エネルギーの平和利用で、人類はバラ色の将来を描こうとしている。80年代の生物学を担う遺伝子工学が、遺伝子操作の技術を誤らず、インシュリンの量産化や夢の制ガン剤として注目されているインターフェロンの実用化などへの道を賢明に選択するならば、それは今後の人類社会に与える大きな福音となるに違いない。

生命の科学の探究とともに我々は、人間にとって生命の本質とは何か、を常に問い直してゆくと同時に、新技術の安全性についても常に社会との対話を行ないながら、その同意を求めてゆくことの必要性を改めて痛感している。

- ・児玉浩憲著「結婚・遺伝・生命」（三省堂選書）
- ・岡田節人著「試験管の中の生命」（岩波新書）
- ・田島弥太郎・松永英著「人間の遺伝」（NHKブックス）

大学体育における 認識と理解

井上修梧（体育）

戦時中に大学で学ばれた人との会話です。

「体操の時間には学生はよく身体を動かしますか?」「体操という科目は無いんですが」「えっ!!」心のなかで答えました。*体育はありますが、と。体育は Physical education なのです。

大学体育は4年制大学では講義2単位、実技2単位、短期大学で同じくそれぞれ1単位以上が必修として課せられ、学生の健康の保持増進、社会的道徳的精神の涵養、学生生活を豊かならしめる基礎をつくるなどの目的をもつものである。本学も正課体育、課外体育、健康管理の部門から構成され、これらの有機的な機能によってその目的を達成しようとしています。

正課体育は、人間生活の基本である健康・体力に対する認識を深めるとともに、これを積極的に高める、あるいは維持していく方法を修得し、かつ実践する能力を養うものであり、大学体育がその中心的役割を果しているといえる。

講義目標としては、高等教育の知的水準に合致した健康安全に関する心身の諸問題、身体運動の意義や効果について、体育実技との関連において認識し、将来、益々多様化する社会の指導の立場に立つ人間としてふさわしい保健体育観を確立することに主眼をおいています。

実技では、健康・体力の維持増進、さらには各種の身体運動の経験をとおして、人生における意義を理解し、習慣形成とともに社会における指導者として他に奉仕し、自己を確立していく大学生にふさわしい現代的教養人としての資質を高めることを目標としています。

また、正課体育を基盤として、現在ならびに生涯の体育課題を解決するために、任意参加を中心的な性格として、きわめて自発的な特性をもつ課外におけるスポーツ活動の実践を希望します。それは自主性を持った主体的な体育活動

を通して健康を増進し、人間的な成長をはかることに目標をおきながら、高度な知見に支えられた体力の向上と、技術の向上をはかるとともに、変貌する社会のなかの個人や集団の要求や必要をみだし、深い友情や責任、協調などの望ましい生活経験を基に、より一層の人間性の充実とその完成をはかることにあるといえます。

なお、健康管理には保健管理（定期健康診断・健康相談など）、精神的健康管理（精神検査・診断・カウンセリングなど）、および体力管理（体力測定・処方・体力相談など）があります。

- ・黒沢和夫・井上修梧著「現代社会と健康」（学術図書出版社）
- ・佐橋滋編「トリムのすすめ」（日本経済新聞社）
- ・体育原理研究会編「生涯体育論」（不昧堂）

目習いのしおりに

松本 咲子（書道）

本学図書館の大きな蔵書の中で、書道関係の本が占める比率はごく僅かなものでしょう。それでも四年間書道を選択し、卒業制作を手がける国文学科の学生は、必ずと言ってよいほど、図書館のお世話になっています。書庫には、学書の基本となる平凡社の書道全集をはじめ、二玄社の書跡名品叢刊・日本名跡叢刊、書芸文化新社の平安朝かな名跡選集・日本名筆全集などがずらりと背を並べ、和漢の古名跡のほとんどがここに収められています。学生達はの中から、これぞと思う古典を選んで臨書の課題にするのです。また、創作に取り組む人達も足繁く図書館に通い、詩歌や文章の素材探しに多くの時間を費やします。本の頁を繰りながら心を沸かせる所から、すでに作品づくりは始まっているのです。藤の卒業制作書展が、世評通り「バラエティに富んでいる」とすれば、図書館の豊富な蔵書のお蔭と言っても良いでしょう。

毎年、少しずつ無理をお願いしているうちに貴重な複製本もかなり集まりました。大型資料の棚には、今や稀覯本となった九条本西本願寺

三十六人集や、ものものしい塗の箱に納められた元永本・関戸本・本阿弥切古今集、寸松庵色紙、粘葉本和漢朗詠集などの精巧な複製本が、丁寧に置かれています。目習いという言葉があるくらいで、良いものに数多く接するのは書を学ぶ上でも大切なことです。真跡に触れるのが最高ですが望み難い現在、複製とは言え精巧かつ高価な資料が揃っているのは、併せと言わなければなりません。授業にも借り出しては活用させていただいております。

近代・現代書家の作品集、書道史、書論関係の本も少しずつ増え、専門的な書道雑誌としては、幻の名著と言われた書苑（昭和12年創刊・19年終刊全巻 85冊）の複製版や、墨美のバックナンバーが、ほぼ完全にまとまっているのは賞められて良いでしょう。書品も創刊号からではありませんが購入され、墨美と共に続刊中です。より専門的な知識を得たい方のお役にたつことでしょう。

今年から、学生にも書庫が開放されると聞きます。書道関係の本も選択者のみならず、愛好者の皆さんのお目にとまる機会が多くなるのは喜ばしいことです。大いに目をこやし、心を養っていただきたいと思いますが、中には絶版になってしまった貴重なものもあり、複製なども高価で補充が効きませんので、心して郑重に扱って下さるようお願いしておきます。



図書館から皆さんへの連絡は
閲覧室入口外の掲示板で

資料紹介

ミケランジェロ
ヴァティカン壁画 講談社 全2巻

落合 健一 (哲学)

システィナ礼拝堂天井画の一つ「天体と植物の創造」を見てみよう。神は右手で太陽を、左手で月を指している。太陽は黄金色に、月は白銀色に輝いているようには画かれていないが、中でも太陽の見る者を圧する重量感はずばらしい。今までこれ程大きな太陽を描きえた画家は世界に無いだらう。同じく天井画の一つ「ノアの泥酔」中の酒壺の原寸大の写真がある。この小さな壺の胴の張りのすばらしさ、ミケランジェロの天才性がうかがえる。

ところで、例えばこの「ノアの泥酔」という画題はどのような意味を持っているのだろうか。ミケランジェロは信仰にとって重大な意味があると思ったが故に、これやその他様々な画材をここに配合し描き出した筈である。キリスト教徒でもなく東洋人であり時代も大きく異なる現代に生きる私には、その意味の理解はなほだ不完全にしかできない。芸術に一々その意味を問う必要はないという意見もある。意味の煩わしさと芸術性が害される場合もある。しかしミケランジェロの作品はその意味がわかればわかる程芸術性が高まるものである。ミケランジェロの大好きな私はもっとその意味を知りたい。

天井画はミケランジェロ 30 才台の作品であるが、正面画「最後の審判」は 60 才になった頃の作品である。そしてこれは恐ろしい絵である。人は殉教の覚悟を持たなければ天国に救われそうにない。罪人達は悪魔の使によって引きずりおろされ、地獄の渡し守カロンCharonの舟に叩きこまれ、火と氷、希望なき永遠の闇の中に運ば

れる。この猛烈な審判をしているのはキリスト（ここではローマの主神ジュピターの端正さと偉丈夫さをも具備したキリスト像に描かれている）であって、当然のことながらミケランジェロではない。彼は審判を受ける側である。彼の役割はこの審判があるということを人類に知らさなければならない。ミケランジェロもその一人である人類とは何か。彼が心から尊敬したフィレンツェの大先輩ダンテは言う。

高くとぶべく生れついた筈の人類よ、
何故にわずかな風でかくもたやすく落ちるのか？ （神曲 浄罪界 第12歌）

その人類を愛さなければならない。

永遠の園丁（神）の庭園に一面に繁茂する葉（被造物・人類）を、神からもたらされる善の度合に応じて、私は愛するのである。（神曲 天国界 第26歌）

ダンテと同じようにミケランジェロも苦しみながらそれを実践した人である。

ミケランジェロが刻み、また描く女性像は、優雅な美人というわけにはいかない。一言で表わせばたくましい母親と言ってよいだらう。幾人も子供を生み、その一人一人を丈夫で意志の強い子供に育て上げ、貧困だとか天災だとか戦乱だとかどんな世の中の混乱の中でも常に子供達を支え続け、子供が親の下を離れて遠くに行ってもなお遠くから守り、ホームシック

でくじけそうになる心を慰め、激励する、そのような母親のイメージである。

その中であってここに紹介されている「デルフォイの巫女」は珍らしく可愛らしい女性である。ギリシャの神ゼウスに仕える巫女だが、キリストの受難や復活についても予言したとされている彼女の、若くてひたむきな顔つきが高貴で愛らしい。「最後の審判」の左上コーナーの、十字架を運んでいる若い男性天使の真剣な愛らしさと相対する。



本あれこれ

料理の本と絵の本

天野 ちよ (調理学)

私のところに研究費で買っていただいた「定本日本料理」(主婦の友社全4巻)というのがある。値段も高いが本も素晴らしい。そして大きくて重い。この本の中には東京、京都、大阪は言うに及ばず、名古屋、金沢と日本の伝統ある一流料亭の料理が網羅されている。料理そのものも素晴らしいけれど使っている器が又見事である。日本料理は見る料理と言われるけれど、この本を見ているとさすがとため息が出てくる。

会席料理や茶懐石料理を見聞きするにつれて、築地の田むらや京都の瓢亭などで、どの様な器にどの様にして盛られているか知りたいと常日頃から思っていたが、いくら研究とはいっても、一流料亭の秘蔵の品をそう簡単には見せてもらえるものではない。十年余りも前のことになるが、亡くなられた伊藤弘子先生と学会へ行った折、京都の瓢亭へ行って勉強してこようとお小遣をためてその料亭の前まで行ったことがあるが、結局、古めかしい格子戸を眺めただけで帰ってきてしまった。そんな風来坊が突然行ってもあげてもらえないことを後で知って、勇気を出して入らなくてよかったと思っている。その後、はからずも京都の吉兆で食事をする機会に恵まれ、庭の造りから部屋の飾り、器の数々、料理に対する心遣いなどに目を見張って帰ってきた。所がこの定本日本料理には有名料亭が自慢の器に四季折々の料理を盛り込んで、見事な印刷で本一ぱいに載せてある。どの頁を見てもため息のもれるもの許りである。無理してお金を溜めてその土地まで行かなくても、この本によって何時でも何回でも見ることが出来る。有難いことである。

専門書とは別に私は日本画の全集物を求めて一人で楽しんでいる。浮世絵全集に日本画全集、

東山魁夷全集である。絵も描かないのに絵がわかるかとよく人に言われる。勿論絵の見方など全然知らないし、版画の良さなどサッパリである。それなのに絵の本を開いていると何もかも忘れてしまう。日本料理とどこか相通ずるものがあるが引かれるのかも知れないが、絵の本をめくりながら自分勝手な想像が出来るところにもあるのかも知れない。絵を見ることが好きには違いないが、かといって目がホッペタについているようなピカソの絵や赤や青の原色がはみ出している棟方志功の板画などの高度の芸術はわからないので、あまり好きになれない。竈木清方や小林古径のような絵そのものに何のためらいもなく吸い込まれて行く気分が何とも言えない。自分が竈木清方の画く美人になったり、わらじをはいて東海道五十三次を歩いてみたり深山幽谷を眺めている仙人になってみたり、自分勝手な想像を逞しくしながら、頁の一枚一枚をゆっくりめくって行く楽しさは絵の本ならではの心境である。幼稚そのものと人は笑うが私なりの醍醐味を味わえる幸せを感謝している。

「遊牧民の国を訪ねて」

池野 洋子 (教務課)

まだ薄暗い夜明け前、モスクのミナレットから響く朗唱に眼を覚まされ、再びうとうとした頃、ギーコン、ギーコンと鳴くロバの声に起こされる。三年前の夏、アフガニスタンの旅の一日目は寝不足で始まった。メインストリートでも車の間をロバや羊の群れが行き交い、一国の首都とは思えないのどかさ。家々のかまどから立ち昇る煙が朝もやの様に漂っている。町をゆく人々の顔立ちやベルジャ系やアーリア系で、男性は白いターパンにカーリというゆったりした民族服、女性は袋の様なチャドリをすっぽり被っている。町を抜けるとすぐ礫砂漠が広がり、遠くに彫刻刀で切り込んだ様なギザギザの山陵が見える。砂嵐が吹くと黄一色の世界。日中は40度を越えるので、バスで走る時は、窓

を閉めなければ干物になりそうである。時折現われるラクダの隊列はアフガニスタンの遊牧民バターン族。羊を追って、冬季は南部や隣国パキスタンへ移動し、夏季は北部の山岳地帯で過ごす。ラクダの速度は結構早く、黙々と通り過ぎてゆく。女達の原色の服も子供達の顔もほこりで真っ白。ラクダやロバには家財道具が山と積まれ、鶏が風見鶏の様に乗っていたりする。裕福な遊牧民はラクダの代わりにトラックを持ち、キンキラに飾りたてた車で移動している。最初はサーカスの一団かしらと思ったほどだ。

アフガニスタンへの興味は、あるテレビ番組で一木一草ない褐色の大地と、そこにへばりつく様に点在する黒いテントを見たことがきっかけだった。まず地図を引っ張り出してイランとパキスタンの間にある事を知り、海もない、鉄道もない、石油もない、ないないづくしの国である事を知った。この、現代生活とあまりにかけ離れた遊牧を生業とする人々に対する関心が日毎にふくらみ、色々と文献を調べたが、アラブのベドウィン族に関するものは数多く出版されているが、バターン族についてはほとんどなく、予備知識のないままでかけた。昨年 J. スペインの「シルクロードの謎の民」—バターン民族誌—(刀水書房)が刊行されたので早速読んでみた。著者はアメリカ人で、大使館員として赴任中にこの国の遊牧民に興味を持ち研究した人である。彼等に同行して辺境まで隈なく歩き、生活、習慣、掟や起源、歴史について詳しく述べている。排他的で旅行者を寄せ付けないバターン族のテントに入るチャンスはなかったが、昨年シリア砂漠でアラブの遊牧民ベドウィンのテントに入ることができた。砂の上には羊の匂いの浸み込んだ絨毯が敷かれ、間仕切りに

布が吊られていた。家具らしい物はなく、マットが畳んであり、炊事用具が隅に置かれているだけだった。山羊乳のヨーグルトとナン(うすやきパン)をごち走してくれたが、時々砂やわらがシャリッとする。通過する村のバザールで羊や絨毯を売り、塩や砂糖、茶、小麦粉等を購入するそうである。生活の原点をみる思いがした。いつの間にか物が増え、人間が小さくなっている様な私達の生活に比べ、こざっぱりとした彼等の生活にうらやましさを感じるが、身の周りのどれ一つなくても不便に思うまでに物に頼りきった身にとって、彼等をまねるにはあまりに脆弱な様だ。子供は五才位から羊の番や子守りをし、八才位では一人前に絨毯を織っている。乳離れして間もない幼児が、ちゃんと揺りかごの赤ん坊をみているのだ。オアシスのバザールでも子供達はよく働いていた。部族の女性は勇敢で、いざとなるとライフル銃も使うという。先日、ソ連軍の進攻に抗議して女子高校生がデモをしたニュースを新聞で読んだが、チャドルの下には強固な意志と強い自己主張を持っている様である。遊牧という言葉のもつ響きはロマンティックだが、苛酷な土地から得られるわずかな恵みをもぎ取り、自然にも人間にも戦闘的にならなければ生き延びることができない。旅行中、ふと大分以前に読んだ和辻哲郎の「風土」を思い出

(カットも池野さんです)



最新の受入資料から — 新規継続雑誌

昭和文学研究	英語教育ジャーナル	黒人研究	別冊文藝春秋
比較文学研究	鷗外	島崎藤村研究	新日本文学
翻訳の世界	森鷗外記念会通信	作品	現代詩手帖
伝統と現代	Modes et Travaux	小説新潮スペシャル	オペロン
基礎フランス語	アメリカ小説研究	むらさき	文学的立場(第三次)

閲覧室にて

不安の中で来るべき未来を考える時に

— A. トフラー『第三の波』を読んで —

川辺 摂子 (国文学科2年)



数年前に『ノストラダムスの大予言』とかいう本がベストセラーになったのを記憶している人も多いかと思う。最近、またその続篇が出たようだ。この『第三の波』という著書名を初めて耳にした時、私は、正直言って「またあの類か」というウンザリした気持ちになった。ここ4、5年は、テレビでも週刊誌でも、やたら興味本位に未来を詮索する傾向が増え、いやでも目につくことが多かった。複雑で見通しのつかない現代にあって、我々は常に不安である。我々の身近には、今まで想像もできなかった文明が出現し、そして、考えられないようなその弊害が氾濫している。そんな中で揺れ動く人心をうまく引きつけ、その不安を増幅するマスコミのやり方に、私はいつも、興味だけで見過ごせない何かを感じていた。

『第三の波』も、我々の来るべき未来について述べていることに変わりはない。しかし、これは未来への不安を助長するようなものでは決してなく、むしろ現在の我々の状況—その変革しつつあるものを正確に分析し、知らしめるものだ。産業、家庭、メディア等のあらゆる領域に、今起こっている変化を、わかりやすくいねいに語り、我々が人類の歴史の第三番目の変革を正しく受けとめるのに役立つものであると思う。

私が一番興味ひかれたのは、マスからミニへという考え方である。産業・メディア等のあらゆる分野でマ

スからミニへの移行が行なわれつつあるという論述である。現代社会における人間疎外の問題に目をむける時、マス (mass) — 大量・多量ということがその原因として根底にあったことは確かである。大量生産によって人は無個性な生活を強いられ、大量伝達によって付和雷同的な画一的ビジョンを受け入れ、学校でさえ、大量に集められた生徒・学生の前でマイク片手の授業風景は珍しくない。今、こうした合理的側面だけを強調したこれらの「マス」が、少しずつ変化している。オリジナルが歓迎され、教室の人数も少なくなってきた。第三の波の、そのさざ波程度のものが、我々の身近におしよせていると言えないだろうか。

文明と文明との過渡期に生きる現代人にとって、必要なのは、不安をいたずらに増大させる予言ではなく、文明を持つ生物としての現状の冷静かつ正確な把握であろう。核戦争、異常気象、事故、病気、犯罪、我々を不安にさせる材料はありあまっている。しかし我々はそれをのり越えて進まなければならない。来るべき新しい変化をむかえねばならない。我々は、これから、この第三の波という転換をどれだけおだやかに行なうことができるか、という問題を真剣に考えなければならないだろう。それが容易なことではないと認識すると同時に、我々の大切な使命でもあると、私は感じた。

図書館の30年 (その2)

1976 6月、道内各大学間で受人雑誌バックナンバーの情報交換はじまる (昭和50年度分から)。8月、昭和51年度 (第19回) 北海道地区大学図書館職員研究集会 (於小樽商科大学)、個人発表「本の話」大館光男。

1977 8月、昭和52年度 (第17回) 大学司書主務者研修会 (日本私立大学協会)、「参考図書解題—参考図書に関する研修の部—一般書誌・目録・索引 (和書)

の解題。」発題者赤石正子。昭和52年度 (第20回) 北海道地区大学図書館職員研究集会 (於北海道大学)、個人発表「インプリマツール」鈴木高明。

1978 5月、禁帯出資料の一夜貸出通年実施はじまる。

1979 4月、家郷隆文教授、館長に就任。5月、選書委員会発足。8月、昭和54年度 (第22回) 北海道地

数で見る利用とサービス

統計資料より

他の図書館との資料の相互貸借や複写の申込は、参考係が窓口となって行なっていますが、1979年度の内訳は次のようになります。

相互利用総数 (1979年度)

資料貸借冊数	文献複写件数 (枚)
貸出 39	受付 139 (1,417)
借受 103	申込 253 (3,385)



他館資料利用の館種別内訳

資料借受冊数	文献複写申込件数
大学図書館(道内)16	大学図書館(道内)61
道立図書館 74	道立図書館 7
大学図書館(道外)5	大学図書館(道外)42
国立国会図書館 8	国立国会図書館 132
	その他 11
計 103	計 253

一番多く借りている道立図書館は公共図書館で週二度巡回車による配達があり、貸出期間は一カ月、蔵書目録も揃っているため利用しやすく、全体の71.8%を占めています。

因に道内大学22校の同年度相互利用における借用総冊数は2,323冊、一館平均123冊です。(北海道地区大学図書館職員研究集会企画委員会による報告) 文献複写を依頼するものの大半は文学関係の雑誌ですが、道内に無い場合は複写受入体制の整っている国立国会図書館を主に利用しています。

一館の所蔵能力には限界があり、資料の相互利用、収書の分担など、図書館間の相互協力は、将来サービス向上をはかっていく上での大きな課題で

す。既に横浜市内の5大学で共通閲覧証を発行し相互利用を実施している例もあり、道内大学間でも検討中とのこと、今後が期待されます。

区大学図書館職員研究集会 (於北海道薬科大学)、個人発表「英米文学記事索引について」佐藤昭子。

1980 4月、蔵書106,433冊。6月、三島由紀夫資料目録・記事目録作成。8月、昭和55年度(第23回)北海道地区大学図書館職員研究集会 (於東日本学園大学)、事例報告「道内異種図書館間の相互利用」鈴木高明。9月、藤女子短期大学30年・藤女子大学20年開

学記念式典。11月、自動販売方式の複写機設置。

1981 4月、館内の事務組織を一部変更、逐次刊行物係、並びに書庫係を廃止しそれぞれの業務を奉仕部・総務部の分掌とする。学内利用者の入退館チェックを廃止。閲覧室・書庫等の資料は一部を除き直接検索方式とする。

(12号に追記 1974 10月、伊藤政雄教授、館長に就任。)

NEWS....

★4月から、サービス・システムが変わりました。

書庫内の資料も自由に見られます。今まで利用者が直接探せるのは閲覧室にある資料に限られ、書庫内にある殆どのものは係を通さなければ見られなかったのですが、4月からは誰でも自由に書庫に入って目指す資料を探せるようになりました。使う人が書架上から取出し、また書架に戻す方式ですから時間もかからず、ずっと使いやすくなります。先ず目録カードを調べてから書架上で探すというのが検索の手順ですが、庫内を気ままに探索する楽しみも増すことでしよう。

入退館時のチェックがなくなりました。入館時、学生証を提示しなくても入れます。退館の際の持ち出し資料のチェックもありません。但しコート、バックなどは各自でロッカーに必ず入れて下さい。

貸出カウンターは閲覧室入口に移りました。ここで館外貸出、予約、貸出更新などの手続きをします。

調査案内カウンターをご利用下さい。今までの出納台の位置にあります。利用上の相談、読書相談など何でも、購入希望図書の手続き、他機関利用の手続きも受けます。

＜お 願 い＞

入退館が自由になり、また資料も直接利用者が扱うことが多くなります。図書館は皆さん自身のものです。常に使いやすい状態に保ち、より中身を充実させていくには、皆さんの自覚と協力が必要です。ぜひ次のことは守って下さい！

- 資料は大切に、書き込みはしないこと。持ち歩くときは雨や雪でぬらさないように。
- 館内では静かに。
- 書架から取り出した資料はもとの位置にもどして下さい。
- 利用の規則、手続を守って下さい。
- 食物を持ち込まないで下さい。

